中間報告書

令和８年９月１日現在

１　事 業 名　備中で暮らす・町家deクラス2026

２　実施期間　　令和８年１１月３日～令和８年１１月２９日

３　事業内容

① 事業の目的・概要

備中圏域の歴史的環境（町家・町並み・暮らし文化・歴史など）の資源を使って、地域の生活文化や町並み、町家、自然環境の魅力を再発見し、参加者とプログラム運営の地域の方々のつながりを作り出す。

テーマ
１（暮らし文化の継承）
地域での伝統的な食をテーマにした味噌づくり、発酵食品づくり、町家改修のワークショップ、丁寧な暮らしの実践として金継ぎの技術講座、地域の素材を使った工芸品づくり、街歩きを通しての地域の歴史の学びなど
２（生命流域圏の関係人口作り）
３（都市住民が担う新たな農林業の仕組み）
４（流域圏内でのサードプレイス作り）
２～４までのテーマを横断する内容で「流域圏で種を蒔く1日」の農業体験プログラムを実施、内容は別紙参照。
５（次世代人材育成）探求学習、PBLなどで町家・町並みの価値を知る、課題を考えるプログラム作成。

② 事業の流れ・進捗状況等

＜実施したこと＞

プログラムの内容、体験型１７プログラム、まち歩き１４プログラム、とと道を歩く４プログラム、タネを蒔く４プログラムが決定し、9 月上旬から冊子を配布、9 月 20 日より HP をアップし参加受付開始までのスケジュールと準備が整った

＜今後、実施すること＞

事業の広報、冊子の配布,SNS やメディアでの広報、参加者の受付、３９プログラム実施に向けて準備と当日のプログラム実施。（目標は４０プログラムでした）

③　これまでの成果･効果、今年度事業終了後の成果･効果の見込み

・学生たちとの連携プログラムが４つ、うち学生中心でプログラム開発と運営までを開催するプログラムが２つ実施できる。また新たな体験６プログラムを加え、まち歩きも新たな３地域で実施され。地域、団体とのまちづくりの連携が期待される。タネを蒔くプログラムでの交流、関係人口がどの程度交流が進むか、その事業の効果が成果につながる。今まで以上にリピーターが増え、初めての参加者が増えることを期待している。

＊（今後の展開の予測のためのアンケート項目の追加）農村部、中山間地への関わりは県南の都市部の生活と大きく関わる関係上、都市部の農村部や中山間地への政策的な態度が、今後問われていくと考えられる。その現状を知るため、都市部からの参加者に農村部、中山間地への関わりをアンケートしたいと考えている、

④ 課題等

・実際に期待した関係人口や交流人口が増えるかどうかは、プログラムの内容次

第である。現状の市民・県民の他地域への関心の度合いも試される良い機会にもなると考えている。
・昨年までの参加状況を考えると、冊子での情報入手からの参加者が相変わらず多い、他メディア、SNS をもっと積極的に利用することが必要である。
・この種の文化体験事業が交流人口を作り出せるかどうかを知る良い機会と捉えている、結果の分析と今後の展開には専門家が必要かもしれない。（県内に専門家がいるのであれば紹介してほしい）

4　参考事項・資料

収支精算書見込又は収支（変更）予算書※

（収支（変更）予算書※は補助金交付申請書または補助事業変更承認申請書に添付した収支（変更）予算書のこと）

写真（データでも提出すること）

当日資料

アンケート結果　他

5　次年度以後の事業展開

次年度の事業展開	事業展開の方向性 （以下のチェック欄のいずれかに「✓」を記入してください。）
	☐ 提案団体の自主事業として収益を得て継続・拡大していくことを目指す。 ☐ 地域づくり事業として事業を継続しつつ、次々年度の自主事業化へ備える。 ☑ その他（ 成果次第です ）
	中期的な目標を実現させるための具体的な事業の内容
	備中町並みネットワークの目的は、町家と町並みの保存と再生にある。 町並み保存に関しては、関係者の意識は確かに向上した。しかし、地域の歴史や文化を大切にしながらまちづくりを進めることは容易ではない。器を守るには、行政がルールを整えることと、住民の意識が高まることの両方が欠かせない。だがその足元では、人口減少と比例して、それを担う人材と財源が不足しているのが現状である。 この 12 年間、町並み・町家という「器」を守る活動を続けるなかで、私たちは、器の外観だけを追っていては見えないもの――その内側にある暮らし、担い手、そして中山間地域の実情――に、少しずつ降りていくことになった。当初の目的から活動を広げたことが、かえってこの発見をもたらした。人口減少と高齢化のもとで、地域の「担い手能力」

そのものが限界に近づいている。ネットワークという回路があったからこそ、私たちはこの現実を知り、その先に新しい展望を描くことができた。

町並み整備の成果は、倉敷・矢掛・吹屋において、すでに証明されている。にもかかわらず、その成果の認識にはずれがあり、次に進むべき方向が定まりきらない。人材不足も大きな課題である。いま求められているのは、民と公の連携である。民のエネルギー、行政の関わり、そして専門家の分析と助言――この三つがそろってはじめて、次の一歩が定まる。町並み整備の財源と、行政の対応が、その要となる。

町家でクラスについては、町家・町並みの価値を高めるイベントを継続することができた。ただし、それが地域の歴史と文化の継承にどれだけ効果があったかを、参加者数のような従来の物差しで捉えることは難しい。「効果の実感が多くはない」のは、活動の価値を測る新しい物差しを、私たちがまだ手にしていないからである。だからこそ、次の段階では、価値そのものを測り直す方法が要る。

「備中の町並み保存によって、私たちは何を残すことができたのか。そして、その価値を誰が次の 50 年につなぐのか。」

この問いは、民だけでは答えられない。県民局とのあいだで、これまでの成果の評価と、それぞれの役割について、あらためて対話の場を持ちたい。そのうえで、次の事業に共に取り組んでいくことを望む。その具体的な方向として、以下を提言する。

【提言】備中の地域資産を次の 50 年へ

― 都市と中山間地域をつなぐ「地域資産パートナーシップ」の構築 ―

【構想の趣旨】

備中の町並み、町家、農村、森林、水、食、祭りなどは、都市と農山村の長い関わりの中で育まれた「地域資産」である。しかし、人口減少・高齢化により担い手と財源が不足し、担い手能力の限界のなかで、ボランティア依存の保存・再生活動には限界が来ている。これまで民間が培ってきた活動を、次の担い手につなぐ新しい仕組みを構築する。

【政策・事業の核】

「都市が中山間地域を支援する」という一方向の関係から、双方が地域資産を持ち寄り、ともに育てる持続的なパートナーシップへと転換する。都市の町内会、学校、福祉施設、NPO、企業、団体などと、中山間地域の集落、農業・林業グループ、祭り保存団体などを結び、森林、水、農地、古民家、町並み、伝統技術などを対象とする。目指すのは「一つのコミュニティが、一つの地域資産を一緒に育てる」継続的な関係である。

【5 つの役割】

1. 市町村を横断した地域資産とコミュニティの把握

2. 都市側と中山間地域側のマッチング・コーディネート

3. 顔合わせや計画づくりなど、初期段階の伴走支援

4. 市町村を越えた調整

5. 再訪率や関係の持続、新担い手の育成など「継続性」の評価

【実証の進め方】

都市側 3〜5 コミュニティ、中山間地域 3〜5 地域から始め、顔合わせ→地域資産を知る→体験→小さな共同活動→再訪→半年・1 年後の評価という流れをつくる。参加者数ではなく「一度来た人が、もう一度その地域に行きたくなるか」を重視する。これは、これまで参加者数では捉えきれなかった継承の価値を、「再訪」という具体的なかたちで測り直す試みでもある。これまでの「町家 de クラス」や「種を蒔く 1 日」の成果を検証し、次の政策へつなげる。

【目指す姿】

都市の人材・技術・市場と、中山間地域の森林・水・食・伝統文化を結び直す。「支える側」と「支えられる側」を固定しない新しい地域間関係を、備中から創出する。市民が先に動き、行政が後から追う――制度は、市民が作った事実の後からやってくる。この順序のもとで、民が実験し、県が仕組みにする。これまで蒔いてきた種を、次の担い手へつなぐ。